

プロレタリア

特集 1

国際共産主義運動の敗北と総括

特集 2

プロレタリア婦人解放闘争のために

総括——その1

コミニンテルンは、一度の左旋回（二大会六大会）と、二度の右旋回（三大会、七大会）の中で、コミニンテルン二（三大会の持つ原則性（戦略の正しさ）は、各国共産党及び四大会以後のコミニンテルン中央の戦術上の誤謬の蓄積の中で七大会に至って自らの国際プロレタリアートとしての路線を放棄した。社民・小ブル階級との統一戦線の中に自己を解体せしめ、被抑圧民族の共産党をのぞいて、メンシェビキ、カウツキー主義、修正主義に転落した。

我々は、コミニンテルンのいくつかの重要なテーゼの主体的批判を通じて、今日の日本階級闘争の最前線に单一のプロレタリア党を建設していく我々の武器としたい。

△批判対象のテーゼ△

- (1) ボルシエビキ化に関するテーゼ
ジノビエフ 一九二五 ドギュメント P一七八
- (2) 六大会コミニンテルン綱領
ブハーリン 一九二八 ドキュメント P四三二
- (3) ソ同盟共産党内の右翼的偏向
スターリン 一九二九
- (4) 七大会反ファシズム統一戦線
ディミトロフ 一九三五 国民文庫
- (5) ハボルシエビキのテーゼ△
- (6) コミニンテルン三大会戦術テーゼへの意見
レーニン 一九〇二 全集五
- (7) 一同志に与える手紙
レーニン 一九〇三 全集六
- (8) コミニンテルン大会基本テーゼ
レーニン 一九二〇 全集三
- (9) コミニンテルン三大会戦術テーゼへの意見
レーニン 一九二一 全集四二
- (10) コミニンテルンニスターインの転換△
ロシア・ソビエト権力の出現の中で国际ブルジョアジーは、その延命のための武器が第一に、産業合理化による帝国主義の寄生性。腐朽化のより一層の深化としての階級協調派のより一層の強化と、第二に、国际白色地区リファシズムの創出による国际赤色地区リソビエト権力への突撃隊の形成としてあった。
- (11) 「権力を乞つたファシズムは、金融資本のもつとも反動的、もつとも排外主義的、もつとも帝国主義的な分子の公然たるテロ独裁である。」（ディミトロフ 一九三五）。
- (12) この規定は、ファシズムリ金融ブルジョアジーといふ当然の規定を与えたにすぎない。問題は、ドイツ・イタリア・日本・スペイン等におけるファシズムが国际反革命突撃隊として、国际ブルジョアジーのひ翼の下に成長し、それは、一九三〇年代の危機の時代において正しい規定であり、スペイン内戦の反革命的勝利、東欧の制

NO. 2	共産主義者同盟 プロレタリア派	
月一回発行		
1975・7・10	定価 100円	連絡先 千葉県船橋市船橋郵便局 私書箱二一號

庄、中国東北部から全土への侵略の中で、日・独・伊三国協定を経て、国際ブルジョアジーの主流派（米・英・仏）に対しても、その反革命世界戦略をめぐって、帝国主義間戦争へと突入していく

時代にあつては、この規定は、敵階級の内部矛盾をとらえきれず、二つの戦術、四月テーゼ以来のレーニン・ボルシエビキの戦術思想の解体であり、一九〇五年の革命におけるメンシェビキの立場、第一次大戦における第二インターナショナルの立場にコミニンテルンを転換させるものでしかない。「資本主義の条件下における、共産主義内部の右翼的偏向は、一部の共産党員の傾向、意向をもつとはつきり形態づけられていないし、またおそらくまだ自覚されてもいないであろうが、とにかくマルクス主義の革命的方針から離れて、社会主義の側へ傾むく意向を意味している。」

「資本主義諸国における右翼的偏向の勝利は、共産党的思想的嫌滅と、社会民主主義の非常なる強化とは、どういうことであるか？ それは資本主義の強化と、強化を意味する。なぜならば、社会民主主義は、労働者階級内における、資本主義の主要な支柱だからである。したがつて資本主義諸国における右翼的傾向の勝利は、資本主義を保持するために必要な諸条件の増大へ導びくであろう。」（スターリン 一九二二）

このレーニンの帝国主義論、コミニンテルン二大会路線の基調の継承は、投げてられ、社民・ブルジョアジーのブルックが社民との協調派として、即ち、労使協調派へと転換していく。

「我々は、資本の攻勢とファシズムに对抗する労働者階級のもつとも重要な城塞の一つとしての階級的統一労働組合を主張する。その場合労働組合組織の統一についての我々の設ける条件は、ただ一つ、資本との闘争、ファシズムとの闘争、及び組合民主主義である」（ディミトロフ 一九三九）

この条件をみたさない、社民派の組合はない。この条件をみたさないのは絶然たる御用組合のみである。ここに、プロフィンテル路線は放棄され、レーニンが左翼小児病で展開したプロレタリアートの中核体の形成期における戦術上の常識が戦略上の原則にたかめられ、コミニンテルンニスターイン主義の社民との協調派へ、更に社民路線そのものへの転換が遂行される。

ディミトロフは、プロレタリア統一戦線、反ファシズム人民戦線、反帝国主義統一戦線の三つの概念を、何の連鎖もなく提起し、ソビエト権力とプロレタリア独裁という共産主義の原則を放棄した。それは、実践的には、事実上は破産に近かつた、プロフィンテルの解体の追認であり、30年代後半の困難な局面の中で、国際プロレタリアートの中核体を聞いたる、路線は放棄された。何よりもドイツ・共産党的敗北は、社会ファシズム論のせいなのではなく、逆にそのことを社民内部の労組にて、重要な影響力をもつた拠点を確保し、かつ同時に労働者大衆にプロレタリア独裁派労働運動として、鮮明な新しい労働組合を開いたり、社民組織の内外を通じて、その開拓をブルジョア

「我々は資本の攻勢とファシズムに対抗する労働者階級のもつとも重要な城塞のひとつとしての階級的統一労働組合を主張する。その場合、労働組合組織の統一について我々の設ける条件はただひとつ、資本との闘争、ファシズムとの闘争及び組合民主主義である。」

(デミトロフ、一九三五)

この路線を実践的に完璧に批判しれぬ人民戦線派批判はプロ独裁のものではない。

さらに我々は、アメリカの労働運動が一九三四年の三大争議（サン・ブランズスコの港湾（共産党）、タイムスターの反乱（第四インダード））、トレドの金属労働者のストライキ（無党派）を経て一九三七年の自動車労働者のストライキ。それはGMのタリット工場占拠ストライキに至るアメリカ共産党及び、産業別組織委員会（CIO）の闘いがまさに、プロ独派労働運動につき進まず。逆に党及び階級の解体として結果した現実の前に逃亡することなく、タイムスターの反乱、プリントのストライキの再建に向けて闘い抜かねばならない。そして、この偉大な労働争議にも関わらず、共産党が敗退したこの事例に対して、党のCIO左派に対する決定的な闘争の回避が、それをもたらした思想上の根拠として、コミンテルン七大会路線の決定的な犯罪性を明らかにしなければならない。

「労働者はバリケードを作つて工場にたてこもり、軍隊のような規律を課して会社の暴力団や警察の武力による工場奪還のあらゆる試みを粉碎した。労働者はまた会社がその出勤を州知事に要求していた州兵による駆逐作戦にあらゆる手段で徹底的に抵抗すると通告した。労働者の連帯は不動であった。そして四四日間の闘いのうちに資本金一五億ドルのゼネラルモータースは降伏し組合の承認、賃金ならびに労働時間、労働条件の大巾の改善を約束した」

(フォスター、一九五一)

一九三七年のプリントの闘いは組合の承認をめぐる四四日間の武装ストであり、その勝利は偉大であるが、GMのほんの譲歩であり、四四日間の闘いによる妥協はプリントの労働者がCIOの前衛部隊であるが、CIOを再編するものとはなり得なかつた。

事実、アメリカ共産党とCIOの闘いは第二次帝国主義戦争後にいた州兵による駆逐作戦にあらゆる手段で徹底的に抵抗すると通告した。労働者の連帯は不動であった。そして四四日間の闘いのうちに資本金一五億ドルのゼネラルモータースは降伏し組合の承認、賃金ならびに労働時間、労働条件の大巾の改善を約束した。

アメリカのCIOは一九三〇年代後期において、中国、ベトナム、スペインのソビエト権力と解放戦争に並ぶ国際プロレタリアーチの典型的であると同様にそうであるが、スペイン内戦の質をアメリカ合衆国の労働運動にとらえかえさなかつた限りにおいてその闘いはプロレタリア国際主義の下、まさに自己をソビエト運動として突き出さない限り、それは第二インターナーへの道以外の何物でもない。

さて、ソビエト運動の創出を闘いとらない限り真の国際連帯にならぬことを、はつきりととらえるべきであった。

このようないくつかの闘いが中国、朝鮮、ベトナムの党に継承される。このことは、これらの国が被抑圧民族国家であり、ロシア・ソビエト以降の革命運動において労働者階級と植民地民族の陣営の中での帝国主義の支配と搾取がとりわけ悪辣におそいかかり尖鋭な敵対矛盾を形成したことによるが、さらにつけ加えて、これらの党がレーニン主義をまさに自らのものとしてとらえ実践していく点にある。とりわけレーニンがベトログラード労働者階級解放闘争同盟以降の

実践の中で、プロレタリアートの委員会の担い手、プロレタリア出身の職業革命家の創出、党的委員会が当該地方の労働運動に決定的な影響力を確保することにもつとも努力し、インテリゲンチヤの貴族的無政府主義と闘つたこと。

(何をなすべきか、同志に与える手紙、一步前進二歩後退)

この意味をもつとも良くとらえ。初期の党的出身階級構成が圧倒的に小ブルジョア、インテリゲンチヤである党的プロレタリア化にもつとも努力した党であることをとらえねばならない。

「一九二八年秋から一九二九年の始めにかけて、ベトナム青年革命同志会の内部で『プロレタリア化』運動が起きた。即ち多くの知識人、学生、小ブルジョアジーが工場、鉱山、プランテーションに入つて大衆に働きかけ、自らをきたえたのである。」

「グリティン・ソビエトは暴力革命をもつて帝国主義者と封建勢力の権力を打倒し、人民の革命政権を樹立しなければならないことを証明したい。」

「我が党は労働者階級が弱小なたちおくれた農業国で成長した。大部分の党员の出身階級は小ブルジョアである。したがつて党は政治思想教育を努め、党的ボルシチキ化のために絶えず闘い、プロレタリア思想の修養を強化し、非プロレタリア思想、主として左翼偏向と右翼偏向の二つの面に現われる小ブルジョア思想に反対しなければならない」(ベトナム労働党三五年史)

六九年一七〇年の敗北以降、首都圏の労働運動に投じた我々の第一段階の闘いは完了しつつある。

我々は今、共産同プロレタリア派の結成をもつて第二段階に突入する。

第二次共産同の戰列において闘つた全ての同志達、我々は、第二次共産同の、第七・八大会、六九年七・六赤軍派結成に至る全ての日本の労働者大衆によるソビエト権力の創出を目指して、とりわけ、理論上、思想上の欠陥を、我々は、全国において革命的労働運動を

進一步歩。現実の路線と組織として物質化しつつ克服し、党建設の階段に突入する。

3-

〈プロレタリア 婦人解放闘争方針〉

①闘うプロレタリア婦人

そしてすべての同志の皆さん

今、アジアは、カンボジア、南ベトナムの革命的民族解放闘争の決定的勝利の中で、帝国主義との余りにも長かった、血みどろの武闘による、植民地從属國被抑圧人民の革命勢力の前進に激動している。

不屈の前進にののき、市場をめぐる争奪戦と国際反革命軍事侵略が、帝国主義本国プロレタリア革命の準備が鋭く問われている。益々どう沿的につきすすみ、不毛な活路を見出さんとしている。

日本両帝國主義への壳國、反革命韓國朴政權もまた、ベトナムに派兵した三〇万の反革命軍隊公表二万の死傷者の血債を自らの民國人民につきつけられ、朴軍事独裁政權は、いかなる軍事弾圧、國

家官僚機構、生産性向上運動（セマウル）、保安処分をもつとしている。革命勢力の反政府運動圧殺ができないことを最もよく知っている。だから彼らは、「共通の敵共产党者と闘つて勝てなければ、全員死ぬという悲惨な覚悟をもつべきだ」（四・二忠清南道厅巡視）といつてゐる。

だがすべての同志の皆さん

我々は、第二次帝国主義戦争における帝国主義侵略軍隊に組み込まれ、侵略の尖兵になりさがった。日本プロレタリアートの裏切りと屈辱の歴史をはつきり想起しなければならない。また、この闘いを。反米抗日闘争として、幾多の血の犠牲で闘いぬいた朝鮮人民の一九四五八月一五日の「解放の日」を、米日ブルジョアジーの朝鮮侵略戦争でふみにじることを許した。戦後日本プロレタリアートの、二。一ゼネストの敗北、ドッヂラインによる企業整備・産業整備に対決する闘いの敗北。レッドバーデと朝鮮戦争の兵たん基地としての、帝国主義本国労働者の負の歴史を想起しなければならない。

今、史上三度目の世界市場分割戦と、革命的民族解放闘争の前進の中にあって、日本帝国主義は、米日独の國際反革命同盟を強めつつ、60年代の高度成長、無政府的生産競争が生みだした帝国主義の諸矛盾を、对外軍事経済侵略、国内政治反動、差別分断攻撃と一体の産業合理化、労働運動の産業整備会化をもつて、文字通りアジア反革命、國際反革命の最前線を、朝鮮反革命戦争をも射程として乗りきらんとしているが、この時代に立ち向うプロレタリア婦人の決起が今日の日本革命の砲備、差別分断攻撃と一体のスクラップアンドビル合理化との闘いに強く問われている。

②帝国主義の不均等発展と米帝国主義に対する民族解放闘争が不可避とした帝国主義世界の三極化（米・独をヘグモニーとするEUOC・日本）の中で、日本帝国主義の世界戦略は、東南アジア諸国の反革命的統合にある。

日帝は、米帝がペトナムにおける軍事的敗北と、帝国主義の不均等発展の中で、ニクソン・クーリンの下、撤退しつつある時、米帝の支配が、半殖民地的、半封建的支配によつて買弁ブルジョアジーを温存し、他方に、農村を根拠地とする武装民族解放闘争に敗北したのに対し、急速な技術革新によつて、買弁ブルジョアジーに、日帝の國際独占体のヘグモニーのもと、産業をうがまし、国家官僚、労働官僚、技術官僚を育成し軍事的独裁との結合をもつて統合せんとしている。

日帝は東南アジア諸国に、全域に進出し、韓国では製鉄所、造船所、エチレンプラントを、南ベトナムでは、ダムと港湾建設を、タイでは自動車組立工場と織維工場を、ビルマでは、ダムと自動車組立工場を、マレーシアでは、製鉄所、自動車工場を、シンガポールでは、造船、電気自動車工場を、フィリピンでは、木材、銅山の開発を、インドネシアでは製油所とダムの建設を推進し、東南アジア諸国は、日帝の延命のための对外侵略の生命線となつてゐる。

だが、カンボジア、南ベトナムが勝利したように、帝国主義と闘い、民族を解放せんとする闘いは、韓国・タイ・マレーシア・ビルマ・フィリピンにおいて、都市における、反日、反政府闘争のみならず、農村を基地とした長期の武装闘争が、解放地区を徐々に拡大しつつある。

我々は、70年代の日帝の国内戦略、とりわけ75春闇をめぐるブルジョアの戦略が決して、上述の東南アジア市場にその生命線を守るために、官僚的、軍事的独裁を買弁ブルジョアジーとの結合によつて押しこすめんとするアジア戦略と無縁でないことをはつきりみてとおり、プロレタリア国際主義の任務と、帝国主義の搾取・収奪・抑圧・隸属化から労働者階級が自ら解放し、プロレタリア政治権力を掌握する任務が特に子供のものとしてもとめられてゐることを自覺しなければならない。

帝国主義は、对外侵略と國際反革命の新たな段階において、より

一層の独占の集中、集積、國家軍事官僚機構への労働者人民の統合、企業一組国防衛派のイデオロギー再編をするものとして、昨年から今春闇にかけ、低賃金・資本凍結・雇用合理化を不況宣伝と一体にすすめ産業合理化、産業再編を、單産と労働運動の産業報国会化による帝国主義労働運動への民同派の統合を押し進めている。

帝国主義労働運動へ転換しうるものとして、本工主義・排外主義による帝国主義労働運動への民同派の統合を押し進めている。

この排体主義に満ちた雇用合理化と、マル運動の中で今日、女性差別に基く構造的な権力再編は、非熟練労働者の切り立て、本工組織整備の名による行政・運輸・通信網の中央集権化をねらう職場の統配合として押し進められ。この中で、60年代に差別賃金、使い捨て労働力として強取奪に抑圧され、職業病に追いやられた、婦人労働者を最初の配転、首切り対象者として、今日電々においては運用二五〇〇〇人の首切りが、医療の名による職業病患者処分（プロジエクトチーム答申）攻撃と一体に進められるとしている。

また、民間においては、工場閉鎖、工場移転の名による独占の併合を押し進め、本工労働者の売却法であり、産業合理化・雇用合理化の促進法としてあつた雇用保険法を女性差別、季節工差別のもとに成立させ、資本蓄積と本工の二組化のサイクルにとり入れた、臨時・パートの解雇、婦人労働者の配転・退職の強要、本工の一時帰休・レイオフを國家権力が支えきり、あらゆる差別と分断・裏切りと売りわたしを強要している。

③こうした中で今日、婦人労働者は、未曾有の切りすての波にさらされている。昨年から、今年にかけ、ブルジョア統計においても、全雇用労働者約三六〇〇万人中五五万人が解雇され、うち五三万人が婦人労働者という恐るべき数字を。さらには、電通三〇〇〇人、全国全産業で一〇万はこえると思われる婦人労働者を中心とした職業病患者の存在を、我々は「収奪者が駆逐される」時代を切り開く。帝国主義時代におけるマルクス主義としてのレーニン主義、革命的女性解放思想でははつきりと受けとめ、反撃の武器としなければならない。この闘いは、プロレタリア婦人を、帝国主義支配のもの言わぬ駆逐とし、彼らの延命の防衛綱として奪取と収奪、切りすてを差別と分断によつてやるしてきた。プロレタリア婦人の奴隸的立場から解放であり。帝国主義と対決し全国反戦闘線の構築リニコ解体闘争を労働運動内部の社会排外主義潮流と真向から闘いつづ。プロレタリア国際主義と帝国主義軍隊解体闘争としてつきすすまんとする、プロ独派労働運動の中で、生き生きと、女性の解放と共産主義の結合をもつて力強い戦列をきずきあげるであろう。

④女性解放と共産主義、プロレタリア革命の一體化が、マルクス・エンゲルス・ペーベルに提唱されて久しい。

第二インター・ナルの婦人解放の数々の決議は、同じくシナ・トットガルト決議（反戦平和）や、バーゼル宣言（帝国主義戦争を阻止し、もし開始されたら帝国主義戦争を内乱に転化する）など、社会排外主義者に投げてられるのと一体に、ブルジョア民主主義の補完物としての女權獲得運動に変質され、この時代において、権力闘争なき平和運動の担い手に婦人闘士は解体された。他方において、軍事体制とあくことない資本蓄積の中で強制労働を強いられた女工の闘いは、日本においても数多く記録されているが、プロレタリア、独裁と女性の解放を担いるべきボリシエビキ党と、その中核的担当としてのプロレタリア婦人革命家の不在は、争闘の長期化と革命的ストライキによる革命勢力の結果、生産点の根拠地化を圖りとことなく、その革命的エネルギーを剥離され続けた。

帝国主義時代におけるマルクス主義にもとづく女性解放理論は、レーニン、クララ・エトキン等によつて、第三インター派プロフト

で、帝国主義諸国における第三インター派プロフィンテルンの敗北と共に深化されることなく投げ捨てられた。

日帝が、この帝国主義戦争において「満州」を侵略し中国を侵略し、大規模な侵略戦争を開始したのは一九三二年であり、一九四一年一二月真珠湾不意うち攻撃をもつて「太平洋戦争」に突入したが、この戦争の奴隸として、まだ侵略の尖兵としてかりだされた日本のプロレタリア婦人の屈辱の歴史を我々は想起しなければならない。アーティア婦人にとつてその生涯をたくすべきところと教えられた、ブルジョア的私有財産制を市民社会に貫徹するための場^{II}家庭はこの戦争によって粉碎され、日本の婦人は略奪戦争の「兵士」としてかりだされた。

既成の婦人団体は、「戰う日本の女性」を宣伝し、軍事目的にそわせようと好戦的に日本女性の勇敢さや、忍耐強さを強調した。一九三八年全壇をはじめとする一切の既成組織が産業報国会に解体され、翌年労務員計画と呼ばれた労働力に対する統制がはじまり、一九四三年には国民労務員計画を範囲をひろめた。公用がどしどし行われ、男子就業禁止の職域の拡大とあいまって、企業整備によつて自分の店や勤め先を失つた男達は全員徵用され、一九四四年には四五〇万の勤労労働員中、保健の労働員が一九二万人、女子挺身隊が四七万人強に達したといふ。

「女性よ生産工場へ！」「職場へ！」「技術を高めよ」という声は、「働く女性は、誇りである」という声と共に全国に満ちた。軍需機械の化学部門等では、殺人道具を作る作業によつてペシゾール等の職業病がまんざんしたといふ。さらに、「新兵器としての女子」（主婦の友）の存在に甘んじた婦人は、わずか一六・一七才にして英雄的な情熱に駆り立てられ特攻隊として走つていく男子達の姿にも甘んじたのである。

この逆流の中で闘つたプロレタリア婦人闘士の群像を、プロレタ

リア國際主義の旗をにぎりしめ産業合理化^{II}軍事労務員体制に反撃せんとしたあの「南葛魂」を継承した女工たちの東洋モスリン（一九三〇）等、の闘いを我々ははつきりと、敗北をのりこえ、よみがえらせなければならない。

⑥帝国主義者は、自らの利益にあわせ、「働く女性」「家庭を守る女性」をつくりあげ。女性は、何と度々服従と忍耐を重ねたのか示している。

この筆舌につくせないプロレタリア婦人が、帝国主義者の「使はずて労働」「身元引受け人」「女房役」として、本工労働者の二組合を押しすすめる踏み台として担わされている事をはつきりと示している。

こうした中で、今日、現代帝国主義との闘いの中に、マルクス・レーニン・クララ・エトキンの革命思想、婦人解放理論を、革命的民族解放闘争、全國水平社一部落解放同盟、プロフィンテルンの闘いを教訓化しつつ深化させ、対外侵略、国内政治反動、差別分断攻撃、産業合理化攻撃と、その最前線において、自ら生産点において不退転の根據地を建設し、対決する中で、帝国主義時代の女性解放思潮を豊富化し、

で、帝国主義の延命の道をはききよめる地位におとしめられたプロレタリア婦人を、プロレタリア独裁の道にひきいれいかなければ

日帝が、この帝国主義戦争において「満州」を侵略し、大規模な侵略戦争を開始したのは一九三二年であり、一九四一年一二月真珠湾不意うち攻撃をもつて「太平洋戦争」に突入したが、この戦争の奴隸として、まだ侵略の尖兵としてかりだされた日本のプロレタリア婦人の屈辱の歴史を我々は想起しなければならない。

それは、また、帝国主義が、民族差別、部落差別、沖縄差別、障害者差別、女性差別、臨時、パート、社外工、職業病患者差別の上に、産業合理化の中核的担い手を、第二組合^{II}帝国主義軍隊の将来の担い手として、労働者人民内部に、帝国主義の経済上、軍事上の支柱を形成せんとする一切の権力再編・合理化と対決する。プロ独立労働運動^I全人民的政治闘争に、「原職を奪還」し「原職を死守」するプロレタリア婦人の團結をひきいれることである。

この闘いは、J.O.派、社共人民戦線派の、プロレタリア権力闘争なき、制度化要求が、今や、国家官僚機構による労働者人民の分断^{II}国家的労務管理としてその反労働者的剥削を雇用保護法、プロジエクトチーム、安全衛生法等に明らかとなり、彼らの本工主義。排外主義と闘うことなく、最早「一人の解雇者一人の職業病」のための闘いとすべての労働者階級・被差別大衆の利益を一体のものとして闘いぬくことはできない。

彼らと、帝国主義による、プロレタリア婦人への融和攻撃と闘う、自らの生産点からの排除・機械制大工業生産と労務管理による精神と肉体の破壊（職業病）と患者処分が、すべての労働者階級への先制攻撃であり、侵略反革命体制を急ぐ権力再編の一大突破口であることをみぬき、J.O.派、民同派の一切の闘争圧殺をねのけ、共産主義の原理のもとに、プロレタリア人民の多数を獲得する大道を開くプロレタリア婦人はふみしめよう。

今、我々は、この栄誉ある婦人解放の闘いを、帝国主義にたち向い、プロレタリア国際主義とプロレタリア独裁、共産主義革命に向うものとして、産業合理化と労働運動の産業合理化を阻むものと産業合理化の原理のもとに、プロレタリア人民の多数を獲得する大道を推進していく。

この闘いは、全日本山闘争を頂点とした全国反合実力闘争の戦列^{III}を担い、他方において、解雇・配転・職業病切り下して攻撃の矢ももてに立たされているプロレタリア婦人の皆さん。

この一切の闘いの前進を擋けて、帝国主義の对外侵略^{IV}を止めようとしている革労士として、自らをきたえつつ、單一の党^V革命勢力（プロフィンテルン、労農被差別大衆の反帝統一戦線）の中に、プロレタリア婦人、農村婦人、被差別婦人の戦列を準備しようではありますか。